



城外の掘水 水しづわ
風がとどけば
水皺がのびて光つて
間断なくゆれる
人間の倦怠の曲線に
射しこんでくる
リズムのように
静

私は明治人間
ランプの掃除も
真裸の泳ぎも
幼時の思い出
だがまけないぞ
背骨も腰も
シャンとして
人間の不幸に立ち向う
金属の板に
成りきるぞ

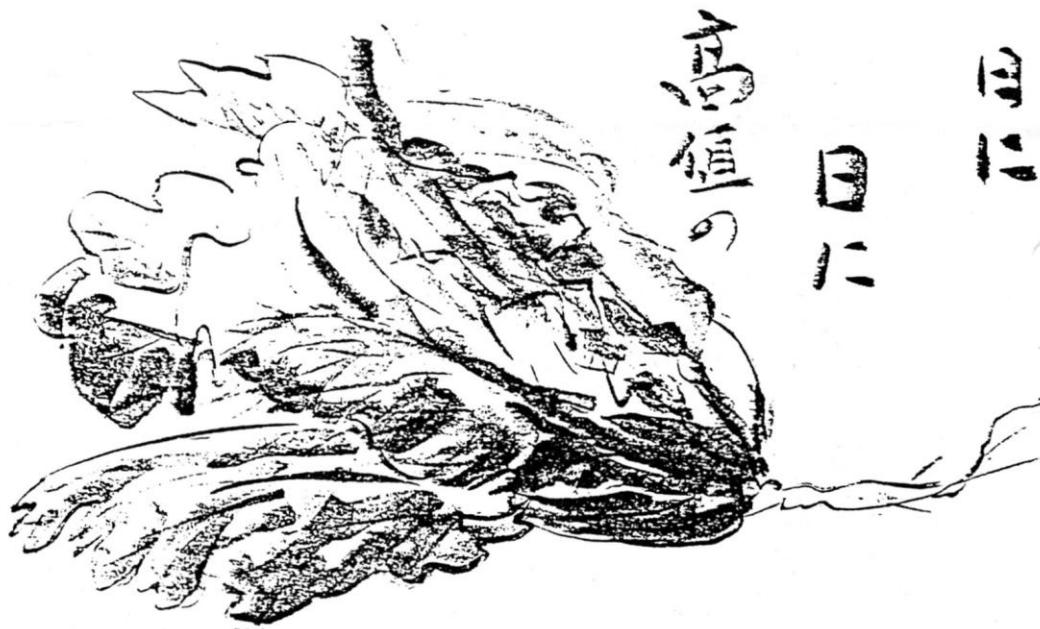
二条

青野家

日に

日に

高橋の



『燎原』誌友(会員)の皆さんへ

私達は、中東問題の平和的解決を念願していましたが、アメリカ・多国籍軍の大規模な武力攻撃の開始、イラクのイスラエル、サウジへのミサイル攻撃など、湾岸戦争は日一日と激化の様相を示しています。自民党政はアメリカの軍事作戦に全面協力を約し、膨大な「戦費」の分担や自衛隊機の派遣を強行しようとしています。さらに、西岡自民党総務会長の発言にみられるように、戦争協力・海外派兵を正当化する国民意識の形成を企図しています。私達は、戦後四十五年、日本国民が守ってきた平和憲法を根本から踏みにじられる危機に際会しています。

事態は、どの様に展開するかわかりませんが、今こそ、「湾岸戦争反対」、「日本政府はアメリカの戦争に協力するな」、「自衛隊派遣反対」、など国民世論を一層強めなければならぬ時に至っています。

『燎原』誌友の皆さんとの意見を緊急に結集して世論に訴えたく思います。戦前戦後、平和と民主主義の運動にかかわってこられた会員の皆さんの貴重な御体験をふまえた、湾岸戦争反対、日本の戦争加担を許さない御意見を、寄せていただき、それを編集して今日の危機に『燎原』として対処したいと思います。

一、戦前戦後のご体験の中でも最も印象に残っていることをあわせて、

今日の湾岸戦争拡大阻止の御意見を述べていただくこと。

二、八〇〇字以内(長短可)
三、二月一〇日までに編集部におどけ下さい。(二月一〇日、第七九号として発行予定)

一九九一年一月二三日 『燎原』編集部

右の訴えをしましたところ、多数の皆さんから御意見をいただきました。連日のはげしい空爆から地上戦闘の開始と核兵器使用も辞せずとされ、中東大戦争へ、地球環境大破壊への危険が日ごと高まっています。湾岸戦争やめよ、日

(一九九一、二、一二)

掲載はお名前の五十音順によらせてもらいました。

私は戦前は誰からも日本共産党に入党をすすめられもしませんでしたし、また自らも入党の申込もしませんでしたが、一介の弁護士として、日本共産党員或はその支持者として検挙された人々の主張を弁護する立場で、弁護士として活動したことが、当時の法律でも当然許されるべきものだったのに、治安維持法第一条の「目的遂行罪」に該当するとして起訴され懲役刑に処せられた経験をもっています。つまり、治安維持法は、戦後は憲法上当然な行為として保障されている平和とか民主主義とか、つまり革新的な運動はおか、そういうことを願う「思想」そのものを悪として非合法化していました。このことは当時の特高警察や検事局、いや裁判所までが治安維持法違反事件の被告人たちを「思想犯」とか「確信犯」と呼び、担当検事を「思想係検事」といっていた事実からも明らかです。いま、湾岸戦争にたいし、反戦平和の運動が全世界各地で起つておらず、当然のことながら日本でも公然と行われています。戦前

治安維持法が猛威を

暗黒時代だったら、全く想像もつかないような現象です。

自民党海部内閣は憲法の平和条項を真向うから無視し、日本のような戦争放棄、武力否定、再軍備禁止の規定のないアメリカをはじめとする諸国が「多国籍軍」を構成し、イラクにたいし武力攻撃を加えていることを「確固として支持」しこれに戦費を供与しているばかりか、自衛隊機を部隊として派遣する構えまでとっています。日本が国連に加盟しているからといつて国連決議に藉口して「多国籍軍」の「武力による威嚇や武力の行使」に荷担することのできないことは誰にでもわかることがあります。

だから日本国民は胸を張って堂々と大いに湾岸戦争反対を叫びその世論を高めるべきです。またこの運動にたいする官憲の不当な妨害や警察干渉は、断固としてこれを許さないという態度を堅持すべきだとおもいます。

(弁護士)

湾岸戦争に想う

浅井清信

サダメ・フセイン、イラク大統領は湾岸戦争を聖戦だと称し、アラームの神様がついているからイラクは必ず勝つといって、イラク国民を戦争に追いやっている。第二次世界大戦の時、日本の支配層は次世界大戦の時、日本の支配層はこの戦争は聖戦だ、必ず神風が吹いて日本は勝つといって国民を戦争にかりたてた。サダメ・フセインの右の言葉をきいて、私はかつての右のような日本の支配層の言葉を想い出し、日本には神風が吹くどころか、大空襲をうけ、焦土と化したうえに、原爆の惨禍さえ被ったことを想起した。イラクにおいてもかつての日本におけると同じように、アラームの神は大空襲やトマホークの前に何の力ももなっていない。ハイテクの武器の前に、イラクは滅茶苦茶に破壊されつつある。ここで空想よりも科学的視点の重要さを悟らねばならない。サダメ・フセインは武力でクエートを占領し、イラクの国的一部だと宣言し、国連の決議を無視して撤兵しなかったのが直接の原因で湾岸戦争がはじまった。国連が世界平和の為の組織であるから、武行使を容認する決議をすることと自体、自己矛盾をおかす

ことになるが、それが故にフセインのクエート占拠が正当化されるものではない。アメリカが戦後バランスナ人を不適に追い出して、次世界大戦の時、日本の支配層はこの戦争は聖戦だ、必ず神風が吹いて日本は勝つといって国民を戦争にかりたてた。サダメ・フセインの右の言葉をきいて、私はかつての右のような日本の支配層の言葉を想い出し、日本には神風が吹くどころか、大空襲をうけ、焦土と化したうえに、原爆の惨禍さえ被ったことを想起した。イラクにおいてもかつての日本における同じように、アラームの神は大空襲やトマホークの前に何の力ももなっていない。ハイテクの武器の前に、イラクは滅茶苦茶に破壊されつつある。ここで空想よりも科学的視点の重要さを悟らねばならない。サダメ・フセインは武力でクエートを占領し、イラクの国的一部だと宣言し、国連の決議を無視して撤兵しなかったのが直接の原因で湾岸戦争がはじまった。国連が世界平和の為の組織であるから、武行使を容認する決議をすることと自体、自己矛盾をおかす

(日ソ協会京都府連会長)

平和の声を全世界に！

飯田助左衛門

ペルシャ湾岸で米軍を中心とした多国籍軍が、イラクに対しても攻撃を開始した。日本の自民党政権は、自衛隊の派遣、九〇億ド

東春江

戦争も長崎、広島に原爆が落されてついに終戦となつた。十数年続いたこの戦争も末期になると第一食べる物がなく、野菜等配給のある時は、隣組長が一括して隣組の配給を受けて一軒一軒分けるのが、或時は菜つ葉一枚、おねぎは一人の家は一本で、どうして一本のおねぎを一日食べるのか考えさせられる事もありました。毎日毎日食べたいばかりで日を送っていました。勤務の休みの日は田舎へ買い出しに行くのですが、お金より着物を持って行くのです。お金がある何も買えなくて、品物が貴重品でした。

食物の店は長い行列、途中で売り切れてガッカリ、人間は生きるのに、かかせないものは食物であると云う事を深く感じました。当時は私は日赤病院に務めていて、患者さんは最初やせてガリガリ、その内に今度はブクブク肥えてくるのです。もうそうなつたら死が

近い事を……そうした患者さんが多かったように思います。新聞に書いてありました。だがどう見ても云っているのか栄養失調の人ばかり、病院にくる人は水ぶくれで死んで行く。私達は、メリケン粉のお粥と「脱脂大豆」のお粥を昼に頂けたので栄養失調にならずに、すんだのでしょうか、戦争はもうコリゴリです。電気の明りが外にもれない様に暗い所で何も出来ず、ビクビクしながら生きるだけ、何の希望も持てず、人の命を虫けらの様にあつかわれました。天皇の名前を云う時は起立して物ごとを言い、あの馬鹿げた事は二度とくりかえしたくないと思いません。

又、最近他の戦争の手助け、兵隊を送るなんて誰が考えても首をかしげたくなります。きっぱりと断わる勇気を身につけてほしいと切に望みます。（民婦連会員）

ルの戦費の支出を決定した。国会での論議なしで軍事費をだすことには、アメリカの要請に依るものであることは明らかであるにも拘らず、海部首相は自らの発意による決定だ、とアメリカの強要であることを否定している。この戦費を出さないと、日本は世界の孤児になると言つて、国民を威していく。世界に類のない平和憲法を持つ日本が、戦争の仲間入りをすることはなく、戦争を止めろ！と叫び続ければよいのだ。一部の死の商人の口車に乗つて、加担するの愚はさけねばならない。太平洋戦争を強行する為に、日本の支配者たちは戦争反対者を獄舎に投げ込んで、天皇の名の下に中国を侵略した。東洋平和の為、正義の戦いだと云つて始めた戦争で、何百万人の兵士は戦死した。広島や長崎に原爆が落下されて、非戦闘員が何十万人も殺された。東京・大阪・名古屋の他、日本の大都会は爆撃と焼夷弾で焼野原となり、何

十万人の市民が殺された。正義の名の下に起された戦争で、多くの市民は悲惨なドン底生活で餓死寸前であった。こうした無益な戦争の体験から生まれた立派な平和憲法を持つ、地球上の唯一の国日本が、戦争を止めよと叫ぶのは、崇高な義務であると云いたい。戦争をすれば、儲ける死の商人といわれる武器の製造や販売をする者、それに加担して甘い汁を吸う、政治家や官僚や職業軍人がいる。今日戦争を肯定する政治家や経済人や一部の学者や評論家なども、死の商人のおこぼれを頂戴する劣等人であろう。平和に優る政治はどこにもない。平和憲法をなし崩しに自衛隊を作ったのが、最初の誤りの第一歩であった。程の良い美辞麗句に踊らされると、一般市民は又してもあの身の毛もよだつ、恐ろしい目に会うのは必定で、死の商人の高笑いのみが聞えてくるようだ。

(治安維持法国家賠償要求同盟員)

伊 東 督 太 郎

「金か玉じよう」にしている国連決議は、その対象は多国籍軍といわれ、朝鮮戦争のときのように国連旗を持つていいのです。勝手に、力での解決をめざして、国連によって、八路軍（中國共軍）との戦いに協力させられた経験からしても、何としても戦争は避けねばならない。戦争は始まってしまうと、日頃の正常が異常になり、異常が正常になるもの、戦場とは人間の殺し合いの場で、自分が生き残るために、手を殺す

太平洋戦争の敗戦から四十五年、日米開戦から五十年が過ぎた今年のお正月早々、湾岸戦争が始まり、世界を巻き込んだ世界戦争への道を歩み出した。戦争となると、聖戦とか正義とか平和のためとかいうことは、今も昔も変りないようだ。戦争の背景となると土地、資源、人間の関係が浮んでき、土地、資本、労働の関係によく似ているようだ。私は在学中に現役兵として招集され、内モンゴルのゴビ砂漠での戦闘に参加、敗戦後も武器をもつたまま、中国の内戦に巻き込まれ、当時の山西軍（國府軍）によって、八路軍（中國共軍）との戦いに協力させられた経験からしても、何としても戦争は避けねばならない。戦争は始まってしまうと、日頃の正常が異常になり、異常が正常になるもの、戦場とは人間の殺し合いの場で、自

連に追認させた大国に、金を送ることになります。

ベトナム・ニカラグア・グレナダ・パナマの人々を押しつけたアメリカ、パレスチナの地域を軍事占領しているイスラエルを後押ししている盗人だけだけしいアメリカ

(二月五日)
(元民会長)

に、私は心からいきどおりを覚えます。
そして反射的にイラクを免罪している自分を、情に流されまいと心がけたいこのごろです。

稻 田 達 夫

か、相手を殺すことができないなら、自分が死ぬかという状況に追込まれるもので、相手を生かすために、自分が死んでやろうという人はなかつた。

特に砂漠での戦争は悲惨そのもの、見わたす限り砂の海で隠れる場所もない。昼の暑さ、夜の寒さはまた格別、連日砂あらしに悩まされ、それに加えて防毒マスクをかぶると、体力も限界に達して戦死者は続出、戦場での欲望はといえば水と飲料、休憩と眠ることだけ、わかっているのは今、生きていることだけ。

都市でも水、食料、エネルギー、道路の確保が重要であったが、住民の安全や暮らしの方は二の次、インフレと増税は戦争のつきもの。戦争は始まってしまうと、様相とともに意義の方も一変してしまって、わかれ、朝鮮戦争のときのように、異常が正常になるもの、戦場とは人間の殺し合いの場で、自動が必要となる。しかし今からで

も遅くない。即時停戦とすべての戦争に協力しないという行動を起し、暮らしの中から地方、中央の政治、世界の人々に働きかけねば

平」への道は開ける。戦争は最大の「」であり消費である。また暮らしと文化、地球環境の破壊である。

(元府出納長)

私の戦争体験と湾岸戦争

上 村 栄 一

私は太平洋戦争の時、台湾で飛行師団の気象係将校でした。私の周囲からも、レイテ沖海戦や沖縄戦に、多くの若者が飛び立ち、帰らぬ人となりました。

先日、テレビはサウジの基地で、「ただ任務に向って全力を尽すのみ」という兵士達とのインタビューを報じていました。それは立て前かも知れません。しかし私の経験では、そこに眞実の響きを感じます。そう自分に言いきかせるしか、自分を支えてゆくことはできなかつたのです。私自身もそうでした。

お互いに生命をかけて任務のために尽し、その結果、多くの人が殺され、文化遺産が失われ、環境が破壊される。この愚行に何が私たちを駆り立てるのでしょうか。

「終戦」の詔勅が出され、それが本物とわかつたとき、ある参謀が「だまされた」と大声でわめいたのが心に残っています。しかし私は彼の人にだまされたと言うより、「生命線を守る」とか、い

ろいろ教育や宣伝を受けつつ、自分自身では深く眞実を追及せず、何もわかつていなかつたことを口惜しく思いました。この思いは内地に帰り日が経つにつれ強くなりました。

イラクの軍事力はソ連や米英仏など、先進国の援助によってつくられ、昨年の八月二日以後においてさえ、これらの国や企業が、「契約義務」を履行するのを放置されたと聞きます。そして今、青年達は自分の国や企業がつくった武器や、軍事施設で血を流しています。合点のゆかぬことです。

そう言えば、難民を救うために、他にいくらも方法があるのに、それを口実に何が何でも、日の丸のついた自衛隊機を飛ばそうという主張も、合点のゆかぬことです。

こうした合点のゆかぬことの背景にある眞実は何か。それを明らかにすることが、今求められているのではないでしょうか。そして人類の経験から法則を見出し、そ

れに従って現実を切りとらく力の結集が必要です。それが平和を守る

力だと思っています。

(元高校校長)

戦争は人類と共存できない

奥 村 和 郎

湾岸戦争がいよいよ核戦争といふ人類にとって、破滅的な局面を迎えるかもしれないという危惧が、私たちの良心を苛らだせます。核廃絶を願う私たちは今こそ何をすべきか、と。

人生の中でもっともひかり輝くべき青春時代を、十五年戦争の真っただ中で過ごした私にとって、

当時の絶対主義的天皇制に反対することは思いもよらなかつたし、して闘っている人々がいたことも知る由もなかつた。

私たち中学生は保定陥落、南京占領などのたびに、御所の建礼門までの提灯行列に強制的に参加させられた。小学校以来、天皇を現人神(アラヒトガミ)と崇めさせられ、忠孝一本を叩きこまれてきた私は、反戦という思想はみじんもなかつたし、戦争に負けるなどと考えたこともなかつた。当時京一商(現西京商高)の五年生で、進学に追われていた私は、勉学時間が削られることに耐えられず、南京陥落の提灯行列に参加しなかつ

た。翌日、早速担任の教師から親に連絡があり、こうした「非国民」的な行動が厳しく咎められ、四年生まで「操行」(現在の道徳評価)にあたる甲で通してきたのに、卒業時の成績簿の該当欄は、空白のままとなつた。担任いわく「評価は甲乙丙の内以下で書きようがない」と。

このことが神戸高工受験に大きな障害になるとは夢にも思わなかつた。「操作」のない者を入学させるることはできない。あとで知つたところは、それが当時の校風であった。随分もめたそうだが、幸い高工の門をくぐることはできたが、この一件は私の心中にかなり長い間くらいた陰影を落とすことになった。

ここから私の戦争史が始まる訳だが、感受性の豊かな青春時代、不用意な一言がどんなに青年の心を傷つけることか、戦後私が教育の道を選んだ理由の一つかもしれません。ともあれ人類は「戦争」という悪魔と共存することはできない。魅惑の青い地球は一つしかないのだから――。(1991・2・9)

(元市高教組委員長)

人命は石油よりも尊し

一九四五年八月の敗戦による日本の激動が、考えてみれば私の思想や行動の原点にあるように思う。まさに「革命的」な激動の影響であった。

この年の六月二回にわたる空襲で大阪梅田にほど近い生家を焼かれた。これはこれで忘れない思い出であるが、戦場や空襲、原爆による死傷に比べれば、私など「平凡」な戦争体験しかない。

柳条湖事件（満州事変）の一日前に生まれ、十五年戦争の終ったときは中学二年生だった。この少年期の多感な心に強烈な印象を残したのは、先日まで皇国日本の軍国主義・国粹主義を唱えた教師が、掌を返すように「文化日本建設」「自由主義万歳」を口にしたことである。大本営発表の欺瞞を知った十代半ばの心には、放送でいつわりの「嚇々たる戦果」を放送したアナウンサーまでもにくむ気になっていた。

のことから、安易に時流に流れることの危険性―学問でも流行を追う傾向をふくめて―を感じた。「世ヲ挙げテ濁ルニ吾一人清カリ」という中国の古文の一節も心にとまつた。

酒井一

いまでも、簡単におどらされる日本人の主体性のなさに心を悩ますことがある。「すべてをうたがえ」というマルクスの言葉もたえず心のどこかでくり返されている。

イラクのフセイン大統領の不当なクエート侵略に始まった中東湾岸危機が、アメリカの世界支配の一環としてこの一月半ばに生々しい現代戦となり、日々刻々とテレビでその情況が放映されてくる。

映像に見えるから事実にはちがいないが、多国籍軍と称するアメリカ側からのそれが、全面的に真実たりうるかは、私の猜疑心を動かす。放映やマスコミの記事をたぐみに利用すれば、海部内閣・自民党のいうように、日本の国際平和に果す責任を世界（？）から求められ、自衛隊機による避難民移送計画や戦費の五分の一に及ぶという九〇億ドル（約一兆二千円）の多国籍軍への援助といつた、日本国憲法の平和条項に対する挑戦と消費税につぐ増税が登場することになるのだろう。

しかし、一たび冷静に世界の情勢をみれば、安保条約で金しばりになった日本政府の広言・冗舌とともに、アメリカの不安定

な政治・経済、それを日本に転化させ、中東問題に介入して支配を再編しようとする意図は見ぬけるはずである。みんなで疑い、素直に「政府」「アメリカ」のということを解きあかしてみなければならぬ。本質を見ぬくことだ。

幸いに日本でも世界各国でも、アメリカのサウジアラビア派兵はじめまるこの戦争にノー！の声を大きくあげてはじめている。アメリカはベトナム戦争の敗北を再び繰り返すおそれがあろう。ベトナム戦争の折りは日本の基地がこれを支え加担したが、今度の加担はもつと直接的になり、日本自体の右転回のテコに使われようとしている。

さる二月一日付の朝日新聞も識者座談会を掲載し、「和平へ日本の主張を『日米機軸』を超えるとき」という見出しで、かなり傾聴すべき意見を紹介している。「ブッシュの派兵は基本的誤り」（大前研一）。「アメリカは中東危機を中東

の政治秩序の矛盾の爆発と見ず、イラク対クエートにわい小化した

く、武器をイラクに供給してきたソ連・フランス・中国なども含めた事実上の軍事制裁も実施されたのだから、もとしんぼう強く解決を探すべきだった」（進藤氏）

「日本の新聞では赤十字の記事があまりない。ドイツの赤十字はアフリカ問題や難民問題にも積極的大胆は国連とか米国とか、決まりきったところばかりに金を出している」（暉峻淑子氏）等々。

フセインの不法・覇権主義に抗して、アメリカは明らかにあやまつた重大な一步をふみ出した。

石油よりも尊い人命。この単純な真理からして、アメリカと日本を結ぶ安保の鎖りを断ちきり、国内外の「遺言」でもあり高らかな二〇世紀の金字塔でもある憲法の理念を改めて考るべきである。

（三重大学教授）

一枚の写真

佐古田好一

「鬼哭啾々」という言葉がある。「鬼哭」とは死者の靈が恨めしさに泣くことであり、「啾々」とは、泣き声がか細くて弱々しいことである。

第二次世界大戦が（）に近くな

な物、特高にでも見つかったら、ただではすみませんからね」と念を押した。そんな物を、懇意でもない私になぜ見せるのかと思ったが、どうやら「商売人の目」で見こまれたらしかった。

その写真というは、森を背景にした草原をほふく前進する一人の兵士を横から撮影したものであつた。しばらく見つめているうちに、私は思わず「アッ！」と声をあげてしまつた。「シッ！」と制した主人が「分かりますか？」と横からささやいた。一はつきり分かる。銃を握って前方をにらんでいるのは日本兵だ。それより高い姿勢で二メートルばかり前をほふしている丸腰の人物はまぎれも

な國兵で、その右足首をしばった綱の端は日本兵にしつかり握られているのである。日本兵は、捕虜の中国兵を弾丸よけにして前進しているのだ。

「天皇の軍隊」は「東洋平和」「聖戦」の名において、こういうことをしているのか、と思ったら肌が粟だつてきた。「生身の盾」にされた中国兵は「用済み」の後、どんな殺され方をしたろうと想像したら、一枚の写真から歎々たる鬼哭が伝わってくる思いであった。麻酔でもかけられたように、天皇制軍国主義に「洗脳」された私の頭が、ようやく目をさました。はじめたのはその時からであつた。

(同授研代表幹事)

佐藤昭夫

中東湾岸戦争に籍口した自衛隊の海外派遣・憲法違反策動を断じて阻止するために、私もひとこと。

京都が生んだ初の革新代議士・山本宣治が、日本国民を中国侵略戦争に総動員するための治安維持法に反対し、一九三九年右翼暴徒に刺殺された三月五日が今年も近づいている。翌々年の満州事変に始まり十五年戦争へとエスカレーしていくが、既に二三年には日

本共産党の結成、二八年には『赤旗』の創刊等と反戦・民主のたたかいが始まっていたのが、何故つぶされたか。その最大の理由に、天皇制を頂点とした世界に類をみない「共産党＝国賊」論による反共攻撃と、官憲あげての弾圧があつた。

戦後の平和と民主主義が逆コース化し、五年にして警察予備隊(そのご自衛隊)創設など、日本が朝鮮戦争に組みこまれていった原因に

も、アメリカ占領下で、国会から三五議席に及ぶ共産党が追放され、労働組合活動家の大量解雇等の攻撃を、徹底した反共宣伝のため粉碎できなかつたことにあつた。いま直面する湾岸戦争問題でも、自公民協力の策動がはげしく、社会党も国会では対決、地方選挙では自民党と協力している。しかし朝鮮戦争時は、違う条件と力がある。アメリカの日本国民に対する超法規的力はないし、かつてのように反共宣伝を許さない国民の自覚と、日本共産党的力がある。昨年臨時国会では、国民党の世論と運動により、「国連協力法案」を廃案にした。このためにも一斉地方選挙での共産党的躍進が欠かせない。

反共宣伝の打破にかかわって、最近のソ連のバルト諸国への、軍事干渉問題は重要である。ソ連が湾岸戦争即時停止のため、積極的にソ連のバートル諸国への、軍事干渉問題は重要である。ソ連がイニシアチブを發揮すべきであるにもかかわらず、「新しい思考」の名による最近の行為を、アメリカがみずからの大統領主義にも最大限利用している。ソ連の誤りを一貫して批判している日本共産党的立場への正しい理解がひろがるように努めなければならない。

(前参議院議員)

憲法は屍の上に築いたのだ

塩田庄兵衛

こんなにもいたのか軍事評論家川柳子にひやかされるとおり、素性の定かでない「専門家」がぞくぞくテレビの画面にあらわれて、アメリカとイラクと両サイドの「大本営発表」をもとに、予想をかけて身につけてきた自分の学問をいつそう磨いて、歴史の軌道から脱線しない生き方を追及しつづけたい、と心がけるほかはない。

まがりなりにもこれまでの人生をかけて身につけてきた自分の学問をいつそう磨いて、歴史の軌道から脱線しない生き方を追及しつづけたい、と心がけるほかはない。

それにもしても、アメリカ合衆国の戦争屋たちが、全世界に指図す

る権限を、いったい誰が与えたのだろう。神のみこころとでもいうのだろうか。それならばキリスト教世界の神さまは、アラブ世界のイスラム教の神さまとは相性が悪いらしいから、折合いをつけるのはむつかしかろう。

アメリカの政府高官や将軍たちや御用学者たちが、自分免許の「正義論」をテレビでふりまわしているのを見るたびに、これでは前途は暗いと思う。しかし、それを支えているのが、アメリカ合衆国五

十一年の政府高官や将軍たちや御用学者たちが、自分免許の「正義論」をテレビでふりまわしているのを見るたびに、これでは前途は暗いと思う。しかし、それを支えているのが、アメリカ合衆国五

十一番目の州の知事とそういうほかない日本政府の責任者とそのグループだという事実に対し、日本国民のひとりとして無責任ではいられないという思いも深まる。

戦争による人びとの不幸を肥料にしてしか歴史は前進することができないのか。私は、以前新聞の短歌欄で読んだ、未知の京都のひとの歌を改めて思い出す。

憲法は屍^{ねば}の上に築いたのだと話す父の眼に涙あふれる

(立命館大名誉教授)

二十一世紀が目の前にきている時代だということは、また戦争をはじめたということは、実に情けないおろかなことです。

今、湾岸戦争に、最初に手を出したのはアメリカです。

日本政府はそのアメリカに多額の協力を約束してしまいました。

このことに日本とアメリカの複雑な、ややこしい関係が益々危険なものであることがはつきり誰にもわかりました。

私はこの際、日本はあくまで平和憲法にもとづき、戦争絶対反対運動を促進し、日本の立場をはっきり表明して、今后のあり方を確

田 中 一 男

立するチャンスのときだと思っていました。ところが、どうしてどうして政府は戦争反対はおろか、きわめて危いあべこべの路線に迷い込んでしまいました。

戦争がどんなものであるということは誰でも知っているというものではありません。

戦争は人間に狂気にかえて、知性も叡智も吹きとばしてしまうおそろしいものです。

テレビでみているゲームのようなものではありません。

私も一度招集されましたが、きわめてみにくい野蛮なものです。

た一つしかない地球を、生

物が住めないものにしてしまうかもしないのです。

戦争をはじめた人達は、植物や動物が死滅した地球で、人間だけ

平 和 を 譚 い と る た め に

田 中 策 三

つて戦犯を免れ象徴天皇として残された。

私は腹の底から戦争を憎む。

それなのに、今、イラクのクエート侵略・併合に端を発した湾岸危機は、アメリカを中心の多国籍軍による湾岸戦争に発展し、愚かで悲惨な核兵器、細菌兵器、毒ガス兵器などの使用さえ問題になつて

戦前、私はモップルや全協の運動を通じて侵略戦争に反対し、天皇制の暗黒政治に反対したため、何回もブタ箱や刑務所に放りこまれた。その揚句、一九四一年の大東亜戦争ばつ発の翌日十二月九日の朝には、工場出勤の途上、下車駅に張りこんでいた顔見知りの特高たちに逮捕され、そのまま一年間荏原警察署のブタ箱に拘留された。思想犯前歴者に対する非常措置令による弾圧とは、戦後にになってからヤツと知った。

釈放そして失業の後は、執拗な特高の監視下、職業と住所を転々と変えねばならなかつた。

その間、実弟は治安維持法違反で獄死同然に悶死し、妻の母とともに義兄は東京大空襲で殺され、自分も亦五月の大空襲で着のみ着のまま焼け出された。三百万人の日本人と二千万人のアジア人を殺した大東亜戦争は、日本の敗北で終つたが、この戦争の最高最大の

生きていけるとしても思つてゐるのでしょうか。

(彫刻家七十九才)

(91・2・8)

(長野県在住)

平和憲法に教えられた

田畠

忍

大日本帝国憲法は、戦争肯定の憲法であった。その時代に、日本は盛んに戦争をした。私は、戦争はいやだが、止むを得ない必然のもの、と考えていた。しかし、昭和の二つの戦争にも全く協力しなかった。敗戦後の昭和二十一年に、戦争放棄規定(第九条)の現日本国憲法が、戦争や戦力や交戦権や国際紛争解決の手段としての武力行使や、武力威嚇を廃めることを定めたので驚喜した。

そして、第九条に従って、日本は速早く、「非武装永世中立」の宣言をして、新型の永世中立国になるべきであり、またなるであろう、と思った。

然し、昭和二十六年に第三次吉田内閣が、平和憲法に違反して、米国との軍事同盟条約を締結し、「戦力たる自衛隊」をつくつて、戦争への道をつくってしまった。

ジエノサイドの恐怖

手塚

亮

私は其の時、吉田氏に反対の電報を打ちつづけた。次いで、特に「非武装永世中立」の主張をしてきた。が、日本の政治(政権)は、戦争放棄の代わりに、平和主義憲法を放棄しつづけて、遂に「湾岸戦争」の危局に入ってしまった。しかし、今も平和憲法第九条が改悪されていなければ、せめてもの救いである。

「安保日米軍事同盟条約」の廃棄! 「戦力自衛隊」の「国民救援隊」への改正! 「戦争絶対反対!」等の主張を、国民が挙って叫んで立ち上ることが、今からでも可能であり、必要である。日本の中の國と国民は、かくして始めて、国際社会に於て「名誉ある地位」を得て、世界各国からも、また国連からも、必ず尊敬されることになるであろう、と確信する。

(元同志社大学学長)

終戦前年の12月私は徴用で、舞鶴海軍工廠に勤いていた。その日は大雪であったが、夕方技官を送つての帰り、今の板ガラス工場の辺で、前方風雪の中に二ツの傘を見つけて、近寄つてみると二人の婦人である。ともかく車に乗せて、聞けば、東舞鶴駅迄帰る途中であり、母さんの方は、海兵隊に出たのに驚いた。毎日、TVを通じて、聞かれていた。

久し振りに我が家へ帰ると、小学校二年生の孫から思いがけなく「タコクセキグン」という言葉が

中内広

くと知らないという。「アメリカ軍のことだよ。戦争屋のアメリカは味方が少なく名目上そういうんだ。「赤信号、みんなで通ればこわくない」とおなじだな。さしつめ日本では平和憲法を無視し、ぶち壊そうというわけだ」。「ワングンワングンって、遠い国の大漠で、ラクダとの戦争だろ、テレビでラクダが死んでたよ、戦車と一緒に」。

「違うよ、アメリカを中心の多国籍軍とイラク軍との戦争だ、人間同志の戦争だよ。アメリカはもちろん核保有国。イラクも近代兵器をしこたまソ連から仕入れた。どちらも使いたくてしようがない。君がお年玉を使いたくてしようがないとおんなじだ。お年玉ならいいが、この戦争ほっておけば『皆

殺し戦争』になる。敵も味方も、子供も大人も、ラクダも含めて一切、見境いなしに!」。

「ジエノサイド(大量殺戮)のおそれしさは、一時に大量の人間が殺戮されることにあるのではない。そのなかに、「ひとりひとりの死がない」ということが、私はおそろしいのだ。人間が被害においてついに自立できず、ただ集団であるにすぎないときは、その死においても自立することなく、集団のままであるだろう。死においてただ数であるとき、それは絶望そのものである。人は死において、ひとりひとりその名を呼ばれなければならぬものなのだ」(石原吉郎「確認されない死の中で」より)。(岡山県在住)

じて聞かれるので、暫く会わなかったジッチャンに挨拶がわりに言ったのだろう。

「多国籍軍」てなんだ?」と聞

いる息子に面会のため出て来たが、今日は今迄まつても面会がゆります、とのこと。もう一人は娘さんのようでもあり、亦お嫁さんのようでもあったけれど、私もそれ以上は問わなかつた。

私も丁度帰り途であつたので、舞鶴駅迄送つてあげたが、お母さ

んが大変恐縮して、重箱につめたボタ餅を食べてくれと差出された。米も砂糖もない時代である。この母と子の最後の別れ、そばにいる嫁女、ああ私も子供がいる、

この甘いものどうするか。

この二人がどこの誰か知る由もないが、戦争とは、むごいもの、今でも忘れない。(元府会議員)

中東一帯、核武力行使の気配がじわじわと強まっています。広島と長崎をくり返すなというわれわれの声をほんとうに世界の声にすらができるのか、実際にためされる時が来ました。

危機)六四年(ベトナム、トンキン湾事件)、—わたしの記憶にありと実感している近頃です。一九四一年(太平洋戦争)、五〇年(朝鮮戦争)、六二年(キューバ)

千三百三十一万人のなかのひとり戦争に傷つきしまま 満七十歳

黄の菊を胸ポケットにのぞかせてニユーギニア還りとつぶやく老人再びを読むことなけれ切抜けばたれか読むべし「戦争と平和」

日本の生命線の言挙げに十五年間

永原誠

戦争を知らぬ小沢は憲法を知らぬがごとし自衛隊派遣を云う

肩書きは軍事専門家得々と戦後生バグダッド空襲画面のスイッチ切り東京空襲の夜空を憶う

国民主らし考えぬブッシュ・ホーリーが湾岸戦語る

平和憲法護持がすべての道

日高知史

まさかと思っていた米軍など多国籍軍のイラク攻撃開始を知った時は、すぐさまあの真珠湾奇襲による日米英開戦の朝が憶い浮かんだ。そしてブッシュ大統領のとつた性急な好戦的態度や、素早く対応した海部内閣のその後の動きから、ハイテク兵器の実戦配備とその実験に狂奔して覇権を誇示する米軍関係筋、この機に同調し自衛隊海外派兵に壁穴をと迫るわが國改憲派の策謀がちらつき、共に身の毛のよだつ思いを実感させられた。サダメの暴挙はいうに及ばないことだが、眞実を蔽い隠し人道的だの、正義を口にする連中が心底許せなくなつた。

かつての十五年戦争真っ只中で青少年時代を過ごした私には、多くの尊い犠牲者達から戴いた日本国平和憲法を手にした日の感動が、今更のように脈打つてくる。だから現在ほど、平和に徹する日本姿を世界へ示す好機はないと思うし、どこの国も持っていないわが平和憲法を護り抜くことが、

討伐時の強姦強奪話す古兵「天皇」の名に俺を撲りし

ン海部はヘイと税金差出す

アメリカは増税せぬと、日本はイラク戦にと戦費を増税

とりもなおさず国際社会貢献への誇るべき道に通じているのだとひたすら信じる。同時に世界の人々にも信じて貰うことの大切さを痛感する。

胸の思いを叫びたい

藤谷俊雄

二〇世紀最後の一〇年に入つて、毒ガス戦争の第一次大戦、原子爆弾の第二次大戦、そして戦後のベトナム皆殺し戦争と経験して、口先だけ反省したと称する好戦的な諸大国が、こんなにも早く旧くさくて野蛮な戦争を新しく始めようとは想像もしなかった。われら古い世代は口惜しいといふ情けないといふか、今は湾岸戦争をこれ以上拡げることを絶対に許さず、すぐにも止めさせたいといふ。迫りくる肉体の老化と健康の弱化のための活動の力は枯れ果て、焦りと怒りに日々を送っている者にとって、今ここに叫びを上げる場所を提供していただいた『燎原』の編集部に、まず第一に心から賛同と感謝のお礼を申したい。

次に私は私のような状態にあるものにとっては、『燎原』のこの提案こそが過去の体験から考えて、もっと重要なことであると

愚かな戦争行為のどちらにも勝者いない。いまならみんなまだひき返せるのである。

(亀岡市在住)

愚かな戦争行為のどちらにも勝者いない。いまならみんなまだひき返せるのである。

思う。その理由は戦争に反対し平和を守る最大の鍵は、すべての民衆の心を一つに結集することだとと思う。『燎原』の提案はまず私のような目前の戦争の危機に身体一杯の恐怖と怒りをいただきながら、その叫びたい声を出す方法と場処を持たない者にこれらを与えてくれた。これにはおそらく戦前戦後の民主・平和運動の体験をもつ、多くの同世代の同志の声が集中されるだろう。そしてそれはおそらく高齢者だけでなく、より若い人たちの声を誘うことになるだろう。若い元気な人々は感想を書くだけでなく、独創性を發揮して、もっと行動的・多彩な抵抗運動を提案するだろう。私はこれは私の空想だけでなく社会科学的な法則にのっとった実現性のある予測だと思う。このことが起らなければ歴史の発展はありえないからだ。

次ぎにもうひとと言私のいいたいことは、今の湾岸戦争の中心的指揮者たちの主張を聞いていると、

それが第二次世界大戦の指導者の言葉と全く似ていことが一つ、例えばイラクのフセインの言っている、「イスラムの神はイランの主張だけに正義があることを支持している」という、固くな宗教国家の信念は、かつての「神國日本」の必勝の信念そのままである。これは悲しいことだと思う。これは悲しいことだと思う。しかしこれに対する「多国籍軍」の指導者アメリカのブッシュ大統領は、その「教書」の中で、「われわれの動機は正義である。われわれの動機は『道徳』にかなっている。そしてわれわれの動機は善である」と一方的に絶叫す

る。米大統領は今度の戦争では、多国籍軍の戦争計画を何か月か先までの戦術や攻撃の手段や兵器までを公開し、敵に恐れを与えて戦闘を中止させようとするよう手段をとっている。これは一見人道的で公正を装っているが、事実は自らの攻撃のプログラムを公表することによって、むしろ多国籍軍に参加しているすべての国々にすべての戦闘の共同責任を押し付け、共犯者であることを認めさせようとする意味をもつているとわかる。その意味をもつているとわかる。そしてわれわれの動機は善である」と一方的に絶叫す

中東戦争について

宮川和雄

都府の学校は民主教育を推進した。

第二次世界大戦末期、学徒出陣で、私は九州の大村の陸軍歩兵連隊に配属され、米軍が沖縄に上陸し地上戦になると、大村歩兵連隊も沖縄戦に加わるべく出陣したが、出発した連隊が沖縄沖の海上に米軍の海軍に討たれ沈んだ。そこで私どもの軍隊は宮崎に陣地構築して本土交戦にそなえたが、ここで敗戦を知った。

その後学校に復学し、卒業後、京都府公立高校教員としてつとめ府立嵯峨野高校を最後に退職した。この間、蟻川府政のもとで京

る。米大統領は今度の戦争では、多国籍軍の戦争計画を何か月か先までの戦術や攻撃の手段や兵器までを公開し、敵に恐れを与えて戦闘を中止させようとするよう手段をとっている。これは一見人道的で公正を装っているが、事実は自らの攻撃のプログラムを公表することによって、むしろ多国籍軍に参加しているすべての国々にすべての戦闘の共同責任を押し付け、共犯者であることを認めさせようとする意味をもつているとわかる。その意味をもつているとわかる。そしてわれわれの動機は善である」と一方的に絶叫す

(部落問題研究所顧問)

中東戦争について

宮川和雄

都府の学校は民主教育を推進した。

林田府政になると、民主教育を廃止し、臨調を先取して管理教育を強行して今日に到っているが、神戸のような高塚高校の石田僚子さんの校門事件のような生徒の人事権に関することが、京都では幸い起らないことは、京都の教育運動が発展しているし、私も退職後「平和と民主教育を守る京都退職教職員の会」に参加して活動しております。

中東は、宗教と民族に関って争

いがあるが、米国は平和解決を望まず、霸権主義の戦争は許されません。「安保」はおそろしいです。

来る地方選挙で、民主勢力を結

集して、京都の平和と民主主義を守る戦をみなさんとともに頑張りたいと願っております。

(元高校教員)

蓮佛亨

戦前、十五年戦争に日本が突入するや國民皆兵で、兄二人は兵士として戦場に駆りだされてしまつた。その時の悲しみと、苦労を綴る。

鳥取県の農村部に生まれ育った私は、幼年期をラジオ・テレビ、図書館もない、文化施設皆無の農村地域で、親元を離れ、祖父母に育てられた。九才、五才違いの兄が、軍人・開拓義勇隊員として満州(当時)地方に行ってしまったから、知識欲の旺盛な時期に、教え、伝えてくれる者が居なかつたのである。小学校で教師から教えられることと、教科書以外には、知識を吸収する手段は何も無い有様である。近くの親しくした分限者の家に行って、古びた少年俱楽部を、縁側で見せて貰うのが唯一の楽しみであった。

都市部に出ていき、生活を始めた両親の元を離れ、農村に帰り小学校に入学したのは自らの意志である。しかし、山野をかけめぐり、チャンバラをして泥んこになって遊びつつ、兄一人が共に生活

していたらどんなに良かっただか計りしれぬ。沢山の知識が吸収出来たし、きびしく育てられたであろう。六十才を過ぎた今でも悔やまれてならぬ。

戦争は、總てのことと犠牲にしてしまう。子供心の些細な願いは、両親よりも兄さんと一緒に居たかったのである。酒に溺れた父よりも、兄を愛したのである。

九才の時、次兄は満州の開拓団へ、十才の時、長兄は加古川の戦車隊を通じて満州の関東軍へ配属された。両兄とも便りはよく呉れられた。両兄とも便りはよく呉れられた。便りを通して、誤字・當て字を直してくれた。國語の勉強にはなつたが、悲しみを押さえ、気を紛らわすための便りでもあった。祖父母と三人で淋しく暮らして居たので尚更である。

湾岸戦争は、誰かが仕掛けて勃発した。死の商人・独立資本・アメリカ帝国主義が、今回ほどあらわりになり、よく見えたことはない。死の商人は、米・英・伊・ソに居り、最も覆面をして同類が居る。

あらわになつた悪人をどう退治するか！幼年期に受けた仕打ちに対

戦前戦後の体験の中で最も印象に残っていることといえば、八月十五日ということになる。ドイツの二の舞にならないと思って、七月九日の戦災(和歌山市)も、それほど深刻には考えなかつたら。私は近代史の研究はしていないが、伝記や日記は読んでいる。

今でも印象に残っているのは、深井英五の『枢密院重要議事覚書』である。深井は、昭和二十年九月二十五日(終戦連絡事務局の改組)の条に彼の発言をこうしるしていいた。「総理大臣の議会に於ける演説に於て、敗戦の原因を主として物力の不足に帰し、民族自覚・外國に対する心構、國際情勢の觀測、彼我國力の研究等精神上の方への考慮を殆んど全く没却したるは、深き御趣旨のあることならんとは想像すれども、余(深井)の理解し能はざる所なり」。

彼の発言は戦時中も堂々としていた。解題には「當時法制局の參事官として、また部長として枢密院と交渉の深かつた井手成三氏は、最も覆面をして同類が居る。廣い人だ」とある。

してどう敵を打つか！日頃不斷の平和運動である。(建築家)

渡辺広

と思った」と記されている。いふべきことはいうべきだ。

私はN H K 市民大学の講義を一つ二つみることにしていた。加茂雄三氏の「ラテンアメリカ・その歴史と風土」のテキスト六四ページにみえる「アメリカ合衆国の進出関連年表」を読んでハットした。「一九一五 アメリカ合衆国、ハイチに武力干涉。一九一六 アメリカ合衆国、ドミニカ共和国を軍事占領(一九二四)。一九一七ハイチで武装農民による反米闘争はじまる」、とあつたからである。当時のアメリカ大統領は民族自決主義のウイリソンであった。ウイリソンの表と裏とがこうも違うのか。誰が大統領になろうとアメリカ帝国主義の本質に変わりはないのかも知れない。最近では一九八三年一〇月、アメリカ軍を主体とする東カリブ海諸国との連合軍がグレナダに侵攻、一九八九年一二月にはパナマに侵攻した。アメリカとつきあつていると、三国同盟の一の舞を演ずる恐れが十分ある。(和歌山大学名誉教授)